

網野町松ヶ崎遺跡下層遺物の研究

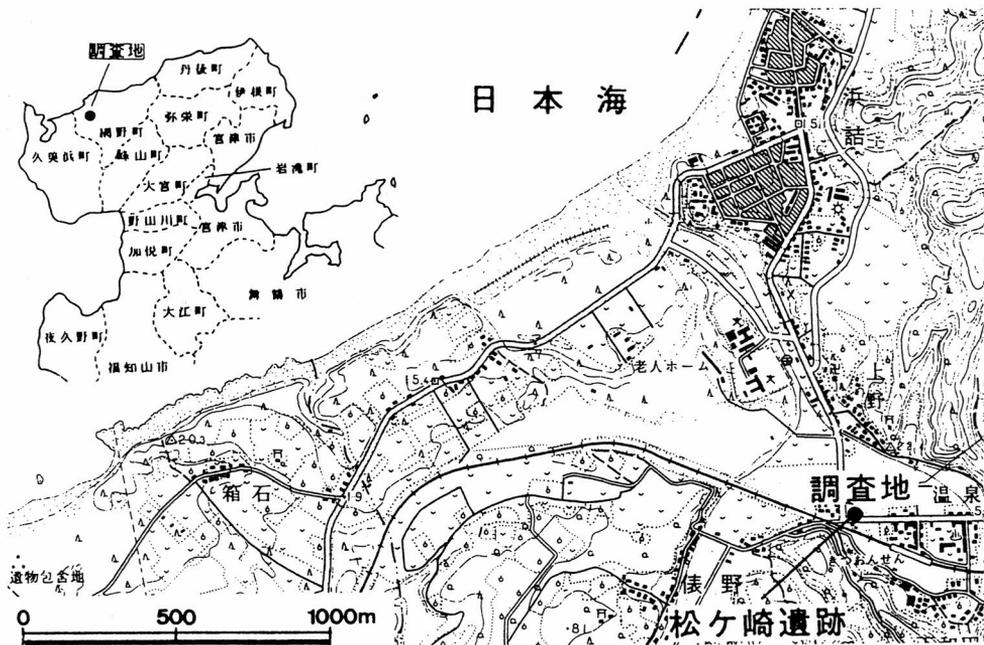
—縄文時代前期の土器編年を目的として—

戸原 和人

1. はじめに

平成9年7月から9月にかけて行った京都府網野町松ヶ崎遺跡の調査で、下層から縄文時代前期の石囲炉と、同時代の遺物を包含する地層が発見された。松ヶ崎遺跡は従来、弥生時代前期の遺跡として知られていたが、この調査により下層に縄文時代の遺構があることが明らかとなった。調査の面積は、約460㎡の小さなものであり、下層（縄文時代前期層）では、さらにわずかなものになったが、この調査によって得られた資料は、これまでに出土量も少なく、不明な点の多い縄文時代早期から前期にかけての実体を明らかにする上で、貴重なものであった。

ここでは、松ヶ崎遺跡下層から出土した遺物をもとに、縄文時代前期の様相を検討し、周辺地域での研究成果をもふくめて、松ヶ崎遺跡下層土器の編年的位置づけを試みたい。



第1図 調査位置図

松ヶ崎遺跡(第1図)は、京都府竹野郡網野町大字木津小字松ヶ崎に所在し、日本海に面する丹後半島の西側の付け根に位置する。遺跡の立地としては、網野町浜詰から久美浜町湊にかけて分布する日本海側で三大砂丘に数えられる丹後砂丘の後背地にあたり、南に連なる洪積段丘の先端部に位置する。縄文時代前期には、砂丘と段丘の間の沖積地は淡水か半淡水の内海もしくは湖を形成していたと考えられるが、現在は古砂丘の分布域と沖積低地に分類される。今回検出した縄文時代前期の層は、海拔0～1m付近で、上記古砂丘の二次堆積に覆われていた。このことは、貝塚の検出が顕著でない日本海側において、同時代の遺跡立地を考える上で示唆的である。

2. 松ヶ崎遺跡の調査

松ヶ崎遺跡は、従来から弥生時代前期の遺跡として知られている。その範囲は、昭和35年から昭和39年にかけて行われた試掘調査によって明らかになっている。これまでの調査では、弥生時代前期と奈良時代の遺物の出土が確認されていたが、平成9年の調査では、古墳時代前期の井戸を検出し、さらに下層から縄文時代前期の石囲炉と同時代の遺物を包含する地層を検出した。

(1) 地層と検出遺構(第2図)

地層は、現在の地表(海拔4.4m)より1.6m下までは黄褐色系の細砂層で、その下の黒灰色粘質砂層の上面からは土師器片が出土している。

海拔1.8～1.5mでは、黄褐色から青灰色の細砂層が堆積しており、両層の間には暗灰色粘質の細砂層が斜めに堆積し、拳大の円礫と弥生土器片が出土している。海拔1.5～0.8mの黒色粘土層からは縄文土器が出土している。山裾にあたる部分で、黒色粘土層(第12-1層)に埋まり、バイラン層(第14層)を掘り込んで築かれた石囲炉S X 03を検出した。黒色粘土層以下では、海拔-0.8mまでの9層からなる地層での調査を行った。

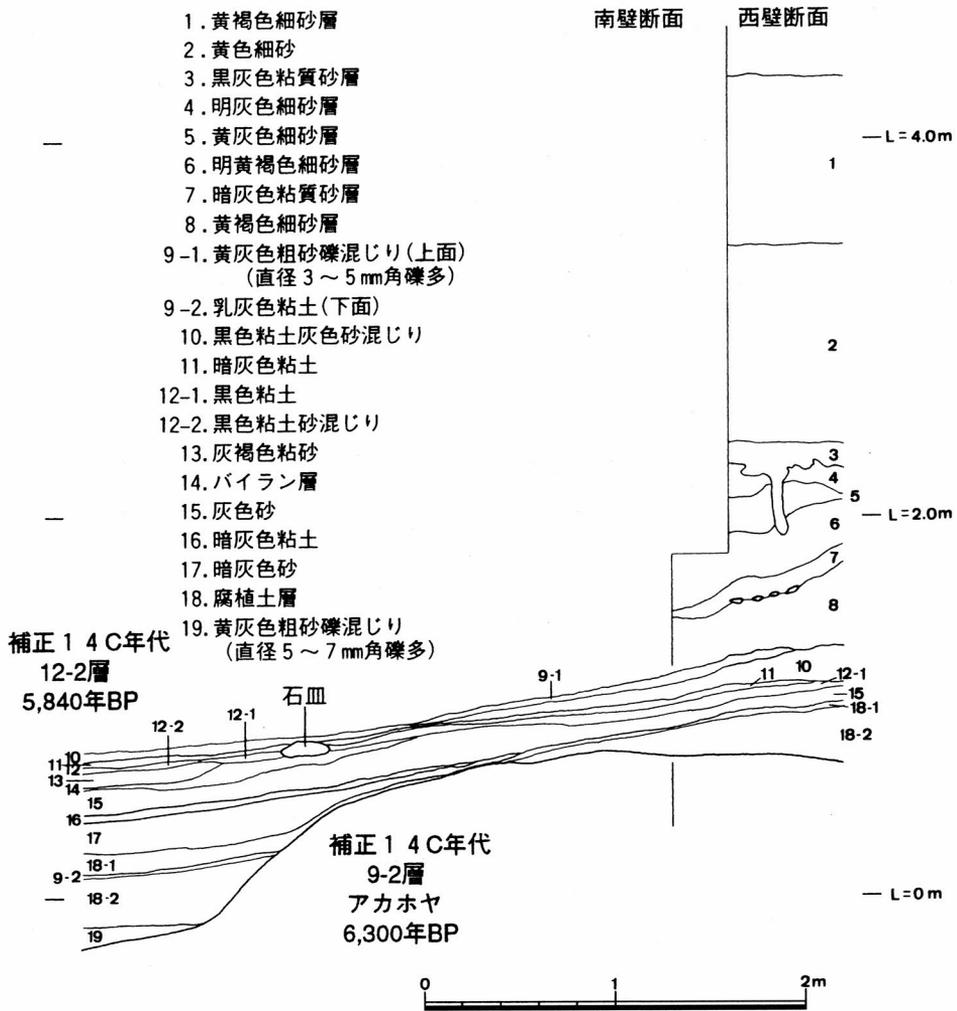
石囲炉S X 03 南北1.3m、東西0.9mの楕円形の掘り込みに河原石の平坦面を内傾させ囲む構造で、内部には炭が散乱していたが、その中から土器などは出土しなかった。

(2) 遺跡の年代

現在は、日本国内で発掘調査を行って土器が出土すれば、おおよその年代がつかめて、検出した遺構や地層についての認識が深まるものである。しかし、型式名や年代が不明の遺物に遭遇するとそうはいかない。年代の不明な遺構が認められた平成9年度の松ヶ崎遺跡では、有効と思われる以下の調査・研究を行った。

① 示標テフラとの同定

分析は、第9-1層で2点、第9-2層で1点の3試料で行った。



第2図 第18トレンチ断面図

分析の結果、第9-1層からは、南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、約6,300年前)に由来するものと、始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT、約2.4~2.5万年前)に由来するもの、大山火山起源のテフラの可能性が考えられる角閃石の3種類の火山ガラスが抽出された。

また、第9-2層からもアカホヤ火山灰と考えられる火山ガラスが抽出された。

このことにより、第9-2層に約6,300年前を上限とする堆積年代を与えることができる。

②放射性炭素年代測定

AMS法による放射性炭素年代測定を、①縄文前期の遺構面上に堆積した土坑S X 04の

堆積土内より出土した炭化物1点と、②石囲炉S X 03内出土の炭化物2点、③遺構のベースとなった第12層内出土の炭化物1点で行った。

測定の結果、下記の年代をそれぞれ得た。

試料名 補正14C年代(年BP)

①S X 04 5,610 ± 50

②S X 03 5,730 ± 50

②S X 03 5,790 ± 50

③第12層 5,840 ± 50

この結果によると、石囲炉のベースとなった第12層が約5,800年前で、石囲炉が形成された年代が約5,800年前以降、遺構の埋まった年代が約5,600年前頃となる。

3. 出土遺物

(1) 土器(第3図)

出土した土器は、第12層の黒色粘土層以下、第18層の腐植土層までの間で出土した前期にあたりと考えられるものが大半であり、第17・18層と第12-1・12-2層の出土土器が比較的多く、第15層の灰色砂層を中間に挟んで2分される。これらの土器は、器形の想定復元より6分類し、器面の調整により9分類、施文により12分類した。

①第17・18層出土土器

山形口縁キャリパー形土器(5)と平口縁砲弾形土器(8・9・12~14)を中心に出土している。今回の調査で最下層の18層から出土した山形口縁キャリパー形土器(5)は、器表面にRLの縄文地、裏面はナデ、爪形刺突を施している。胴部の屈曲部に二連の棒状の押し文を施す。

第12層でも出土している山形口縁キャリパー形土器(18)は、器表面LRの縄文、裏面は丁寧なナデ、施文は口縁端面に爪形刺突、口縁部外面の幅2.5cmの間に5連の爪形状連続刺突、その直下に3条の押し引き文、屈曲部にも3条の押し引き文を2帯施している。器厚は4mmと非常に薄い個体である。

山形口縁砲弾形土器の出土量は少ない。平口縁に山形状の小突起を持つ。器表面RLの縄文地で内面ナデ、口縁を丸く納めるもの(7)が出土している。

平口縁砲弾形土器には、器表面にLRの縄文地、内面ナデ調整。器表面半截竹管による施文のもの(9)や、完形に復元できる個体で、器表面条痕地でナデ調整をし、裏面はナデ、施文は口縁端部に爪形の連続刺突を施しているもの(14)がある。

このほかに、器表面ナデ調整を施し、内面二枚貝による条痕調整の後ナデを施し、端面

には爪形刺突文を施すものや、器形は不明であるが、内外面に二枚貝による横方向の条痕を施し、器表面に貝殻刺突文を連続的に施すもの(10)、器表面縦方向の条痕、裏面横方向の条痕で、口縁部外面と口唇部に二枚貝による2連の連続刺突を施しているもの(15)がある。この土器は、松ヶ崎遺跡出土土器の中でも、特異な施文である。

②12-1・12-2層の出土土器

キャリパー形土器・砲弾形土器ともに、山形口縁と平口縁がそれぞれ出土している。轟系の土器もこの層から出土している。

平口縁鉢形土器(26)は、器表面、内面ともに条痕文をほどこし、器表面ではナデ消し。器表面には口縁の裾部から粘土紐貼り付けによる隆起帯を垂下させ、口縁下で外周する隆起帯に接続する。隆起帯の上には、刻み目を施している。胴部の屈曲部には同様の隆起帯を施すが、縦の隆起帯は上方にのびる。胴部から底部にかけての屈曲部でも同様の隆起帯を施す。いわゆる轟系の土器である。

山形口縁キャリパー形土器(18)は、器表面にLRの縄文地を施し、後ナデている。表裏とも丁寧なナデ、施文は口縁端面に爪形刺突、口縁部外面に5連の爪形状連続刺突、その直下に3条の押し引き文。口唇部は連続刺突である。

平口縁キャリパー形土器は、器表面わずかにLRの傾きを持つ縄文地で、内面ナデ調整。端部無文と、器表面にRLの縄文地で、内面をナデ調整し端部に爪形刺突文を施すもの(20)がある。

平口縁砲弾形土器は、器表面LRの縄文、内面にナデ調整を施し、口縁外面に半截竹管による連続刺突を施す。屈曲部に同じように3条の押し引き文が施文されている。口縁端部には、爪形刺突文を施すものや、口縁の下方に結節縄文による施文を施すものがある。

山形口縁砲弾形土器では、器内外面および端部をナデ調整する無文の土器と、器表面にLRの縄文地で、内面条痕状のナデ、端部外面に2条の爪形刺突文、端部に爪形刺突文を刻み、口縁端部を丸く納める数少ない土器(23)がある。

その他の器種として、器表面が下段で縄文施文後ナデ、上段の器表面と裏面が横方向の条痕で、上段に貝殻斜格子文、下段に3段の爪形刺突文を施すキャリパー形になる可能性があるもの(28)などがある。

以上のように出土した土器は、出土層位や器形に関わらず、器表面に縄文地、裏面はナデ調整するものが圧倒的に多く、施文では、爪形刺突文を多用するという特徴がみとめられる。

(2)石 器

漁労具の石錘は、楕円形の河原石をもちいており、長軸の両端部を打ち欠き、糸かけ部

を作り出している。調理具の石皿には、成形痕は無く、表面に磨滅した使用痕が認められる。また、敲石は長軸の端部や平面の中央部に使用痕が認められる。

(3)木製品

第18層の腐食土層から伐採具の石斧柄が出土している。石斧の着装部を台外側から切り込み固定部を3段に成形しており、福井県鳥浜貝塚に類例が認められる。

4. 出土した動植物遺存体と花粉分析

(1)動物遺存体

第18層の腐食土層から主に出土した。魚類ではハタ科が多く、マダイ・クロダイが続く。ハタ科魚類にはクエに相当する体長1mはあろうかという大型のものから、20~30cmの小型のものまで、複数種が存在する。大型のハタ科魚類は岩礁性で、コブダイ・イサキも沿岸の岩礁域に生息する魚種である。ヒラメ・コチなど砂底に生息する魚類も捕獲しており、多様な海域を漁撈の場としていたことがわかる。哺乳類・鳥類の出土は少なく、ニホンジカ・イノシシ・ニホンザル・ムササビ・オシドリが少量ずつ出土しているのみである。骨角器の素材となった鹿角が出土している。従来、貝塚の少ない日本海沿岸で、こうした低湿地遺跡から動物遺存体を検出できたことは大きな成果である。

(2)植物遺体

第18層の腐食土層から主に出土した。草本類では、オニバス・エゴマ・ヤマノイモ属・ヒョウタン仲間があり、木本類では、オニグルミ・カラスザンショウ・サンショウ・ミズキなどが多い。これら出土した植物遺体のほとんどが、食用とされる種類である。縄文時代に根茎類が利用されていた可能性はこれまでも指摘されていたが、イモ類の出土は初めてであろう。

出土したイモ類は、長軸1.8cm・短軸1.2cmを測る。日本に自生するジネンジョ(自然薯)などのツルの葉腋にできるムカゴ(珠芽)で、食用になる。

(3)花粉分析

第12-2層(黒色粘砂)と、第18-1層(腐食質土)の2層について花粉分析を行った。分析の結果によると、第18-1層(約6,300年前)では、樹木花粉の占める割合が極めて高く、クリーシイ属・コナラ属アカガシ亜属・スギが優先する。低率な要素として、ニレ属一ケヤキ・トチノキ・モミ属・マツ属複維管束亜属などが出現する。草本花粉はイネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属が低率に出現する。

クリーシイ属は、形態からシイ属型がほとんどである。遺跡の周辺には、シイ属およびコナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林とスギ林が分布しており、他に、ニレ属一ケヤ

キ、トチノキの落葉樹やモミ属、マツ属複雑管束亜属は森林の要素として分布していたとみられる。トチノキは湿潤地に生育するが、虫媒花植物であるため花粉は飛散せず、比較的近いところの沢沿いなどに育成していたと考えられる。以上の植物の中で、シイ属・コナラ属アカガシ亜属・トチノキは果種子が食用になる。また、スギ林の発達から、スギ林の成立に適した降雪があったと考えられる。以上のことから、当時は温暖で湿潤な気候が成立していたと推定される。

第12-2層(約5,840年前)では、クリ-シイ属の出現率が低くなり、モミ属・マツ属複雑管束亜属・コナラ属アカガシ亜属・エノキ属-ムクノキが出現率がやや高くなる。草本花粉ではイネ科の出現率が高くなる。

シイ属が減少し、モミ属・ニヨウ松類(マツ属複雑管束亜属)・エノキ属-ムクノキの樹木およびイネ科の草本が増加する。増加した植物は途中相の樹木および草本と考えられ、二次林ないし二次植生が拡大したと推定される。

以上から、18-1層の時期には自然度の高い森林が分布するが、12-2層の時期には森林への人為干渉が著しく、シイ林が減少し、ニヨウ松類・エノキ属-ムクノキの樹木およびイネ科草本の二次植生が拡大する。コナラ属アカガシ亜属が減少せず、シイ属のみが減少することから、シイ属とアカガシ亜属が森林内に混在するのではなく、シイ林・カシ林として分布域が異なっていたと考えられる。また、モミ属・ニヨウ松類は多雪地帯には分布しないため、沿岸部は積雪が少なく、スギ林はやや内陸部の積雪地帯に分布していたとみられる。

以上、松ヶ崎遺跡下層の、縄文時代前期の様相を検討した。

5. 周辺遺跡の検討

つぎに、周辺地域での研究成果をもふくめて、松ヶ崎遺跡の編年的位置づけを試みたい。松ヶ崎遺跡の周辺、つまり近畿地方北部の縄文時代前期遺跡としては、京都府舞鶴市に所在する志高遺跡や、その東の福井県三方町に所在する鳥浜貝塚がよく知られた遺跡であり、研究が進められているところである。

(1) 京都府舞鶴市志高遺跡

近畿北部最大の河川、由良川の下流域に位置し、自然堤防上に立地している。早期から前期の遺物包含層・遺構面は、海拔0~1m付近で、炉跡や石組み遺構などが検出されている。志高遺跡出土土器については、綾部市教育委員会三好博喜氏の研究成果がある。

この中で三好氏は、早期から前期の遺物を層位的に分類し、I期からVI期の6時期に区分した。まずI期を早期末と位置づけ、条痕文を地文とした、口縁部貼り付け隆帯とキザ

ミメ隆起帯とからなる轟B式系土器(4)をその標式とした。つぎにⅡ期を前期初頭と位置づけ、条痕文施文を主体として「3」字条刺突文を特徴とするとし、羽島下層Ⅱ式期併行とした。そしてⅢ期を前期前葉とし、条痕文施文を主体としてD字条刺突文を特徴とし、北白川下層Ⅰ式期併行とした。さらにⅣ期を前期中葉と位置づけ、縄文施文を主体としてC字条刺突文を特徴とし、北白川下層Ⅱ式期併行とした。またⅤ期を前期後葉と位置づけ、北白川下層Ⅲ式期併行とした。それからⅥ期を前期末葉と位置づけ、大歳山式期併行とした。

この研究成果は明確で、松ヶ崎遺跡に最も近い遺跡での作業ということもあり、松ヶ崎遺跡下層土器の編年作業にとっても有効と考えられる。ただ、Ⅰ期の標式とした轟B式系土器とその時期を早期末と位置づけている点に関しては、現段階では一考を要する。それは、轟式土器の成立した九州において、約6,300年前に噴出したアカホヤ火山灰の上から轟式土器が出土することが明らかになり、その文化層を縄文時代前期とする研究が進んでいるためである。

(2) 福井県三方郡三方町鳥浜貝塚

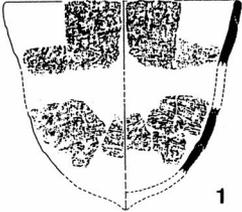
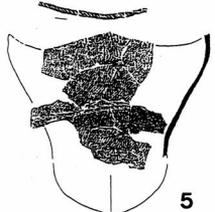
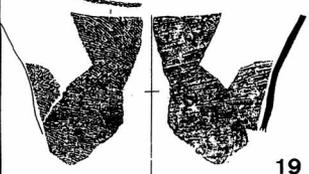
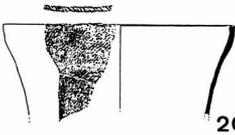
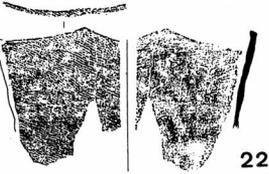
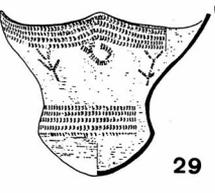
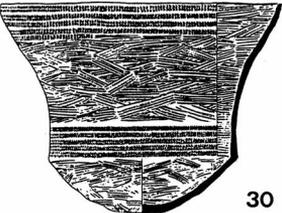
海拔0 m以下で縄文草創期・早期・前期の遺構・遺物が検出される遺跡である。鳥浜貝塚出土土器の研究については、敦賀短期大学網谷克彦氏を中心に多くの成果が上げられている。網谷氏は、羽島下層Ⅱ式併行土器の細分を目的とし、まずC区第4層の出土土器を持って供伴土器を6類に分類している。第1類は草創期の多縄文系土器、第2類は早期の山形押型文土器、第3類は安土N上層式に近い薄手で隆帯上に細線刻を施す土器、第4類は羽島下層Ⅱ式併行の異形刺突文土器、第5類は外面縄文・内面条痕の厚手土器、第6類は表裏条痕の厚手土器とし、この第5類と第6類が北白川下層式とともに鳥浜貝塚前期土器を構成する主体的な土器であるとした。次に、松ヶ崎遺跡下層土器を検討するために必要であると考えられる北白川下層Ⅰ式での研究成果をみると、従来から、北白川下層Ⅰ式の文様は、2連規制の働く「3」字状の刺突文からD字形爪形文、C字形爪形文へと型式変化と考えられていたが、網谷氏はこのうち①2連規制の働く「3」字状の刺突文を抽出して、その原体の使用法により4分類し、うちⅠ～Ⅲ類をもって羽島下層Ⅱ式併行とした。つぎに、②「3」字状刺突文Ⅳ類を含め、D字形爪形文の段階を北白川下層Ⅰa式として細分した。北白川下層Ⅰb式は、これまでの研究成果により、③C字形爪形文と連続爪形文をあてた。これにより、北白川下層Ⅰa式に含まれていた羽島下層Ⅱ式の要素を抽出することで、羽島下層Ⅱ式の要素をより明確にすることとなった。

6. 松ヶ崎遺跡下層の検討

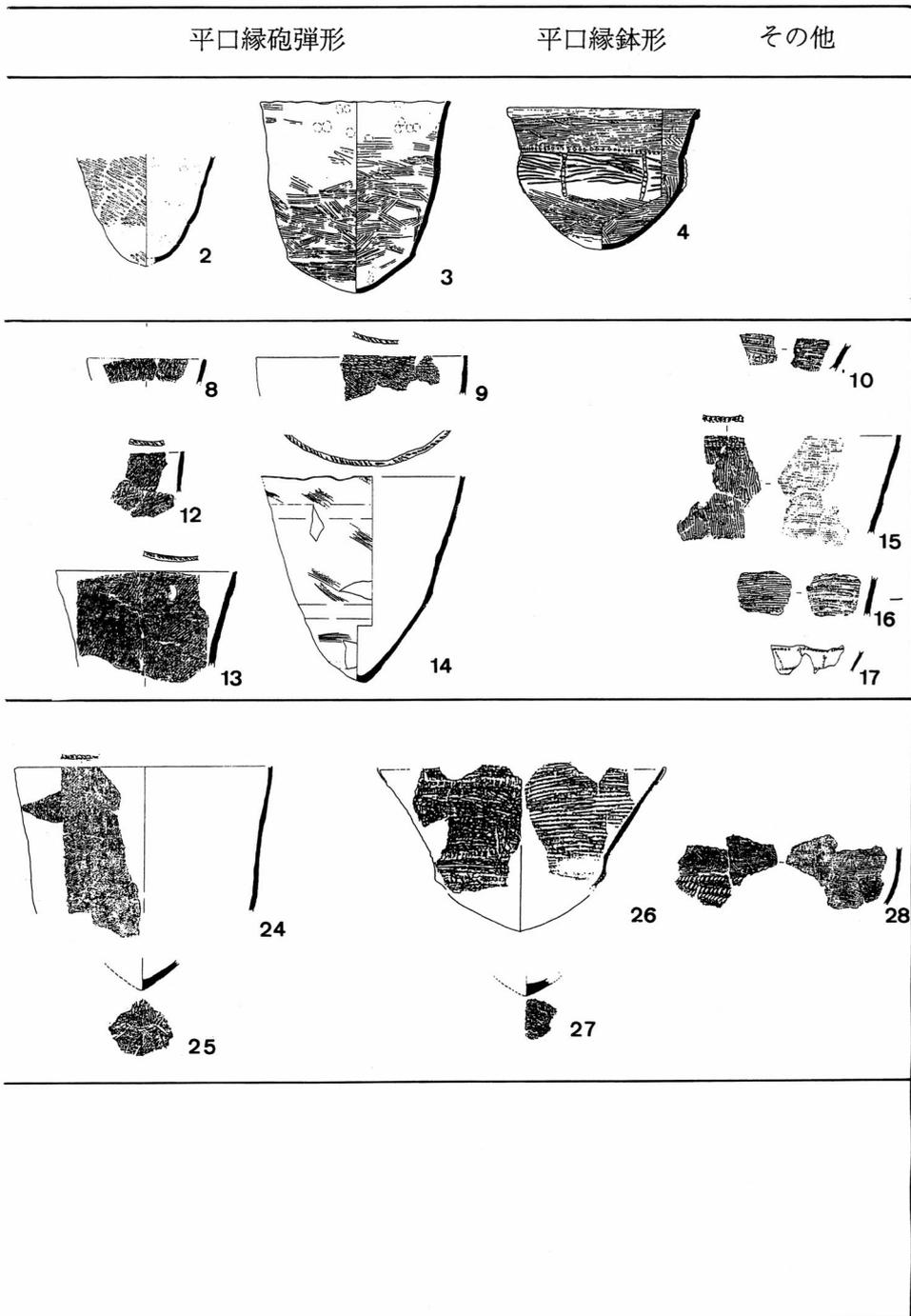
西日本におけるアカホヤ火山灰(K-Ah)の検出の事例は、その多くが二次堆積と判断

されるものが多い。本遺跡の調査でも、第9-1層(黄灰色粗砂礫混じり)で2点、第9-2層(乳灰色粘土)で2点のテフラ分析を行ったのは、たまたま縄文期の遺物を出土する地層にあたったからに他ならない。土器の型式名も分からない状態での調査を進める中で、年代を知る手がかりを探ったことが幸いしたといえる。ともあれ、この調査で行った自然科学的分析により、検出した地層にいくつかの年代を与えることができ、また、その時代の自然環境の復元するための資料を得ることができた。今回得た年代が正しいとすると、第18層出土土器として報告したものは第18-2層出土土器であるから、その上層の第9-2層の年代6,300年BP以前となり、文化層としては縄文時代早期(後半もしくは終末)ということになる。また、第17層出土土器はアカホヤ降灰以降の土器となり、文化層としては縄文時代前期となるが第18-2層出土土器と型式差はまず認められていない。つぎに、第12層出土土器として報告したものは同層出土炭化物で行った放射性炭素年代測定により5,840年BP以降の年代が与えられる。文化層としては縄文時代前期となり、縄系土器の出土をみたことは理にかなっている。

これらの結果をもとに、松ヶ崎遺跡下層土器を志高遺跡および鳥浜貝塚の編年にあてはめてみることにする。志高遺跡の6時期区分のうち、Ⅰ期からⅡ期くらいが対象になろうか。早期末としたⅠ期の土器群は、山形口縁に復元されるものは見当たらないようである。平口縁キャリパー形土器は、器表裏面とも条痕地で、爪形刺突を施す。平口縁砲弾形土器には、器表面縄文、内面条痕地のものと、器表裏面とも条痕地のものなどがある。平口縁の鉢形土器は、条痕文を地文とした、口縁部貼り付け隆帯とキザミ隆起帯とからなる縄B式土器である。この層の特徴としては、条痕文を主体として、縄文や爪形文・刺突文などの施文がみられる。つぎに前期初頭と位置づけたⅡ期の土器群は、器形的には山形口縁・平口縁共に認められて、キャリパー形土器・砲弾形土器ともに底部が丸底化する。つまり、底部尖底の砲弾型土器は消滅し、丸底化した深鉢形土器となるのである。条痕文施文を主体として「3」字状刺突文を施す、羽島下層Ⅱ式併行期となる。松ヶ崎遺跡下層土器は、いずれの土器も尖り底に復元されるし、山形口縁キャリパー形土器の施文をみても第18層では、胴部に二条の棒状出土押し挽き文を施すのに対し、志高第9~10層では、口縁外面に4帯、胴部に5帯を施しており、明らかに施文の発達が見られる。ただ、第18層・第12層ともに出土している山形口縁キャリパー形土器の施文は口縁端面に爪形刺突、口縁部外面の幅2.5cmの間に5連の爪形状連続刺突、その直下に3条の押し引き文、屈曲部にも3条の押し引き文を2帯施しており、器厚も4mmと非常に薄い個体であるため、この非常に発達した文様構成をどう位置づけるべきか問題である。一応の目安として、志高Ⅰ期と同Ⅱ期の間に型式的な位置づけを考えてみた。ただ、前に述べたが志高Ⅰ期には標式とした縄B

	山形口縁キャリパー形	平口縁キャリパー形	山形口縁砲弾形
志高遺跡 第12～13層			
松ヶ崎遺跡 第18層			
松ヶ崎遺跡 第17層			
松ヶ崎遺跡 第12層			
			
			
志高遺跡 第9～10層			

第3図 京都府北部における縄文時代前期の土器細分(1)



第4図 京都府北部における縄文時代前期の土器細分(2)

式系土器の問題もあり、また、志高遺跡ではⅠ期・Ⅱ期を通して内外面に条痕文の地文が続くのに対して、松ヶ崎遺跡では表面縄文、内面ナデ調整が主流を占めるため、集落特性の違いか、時期認識の違いがあるか、などの問題が残る。

つぎに、鳥浜貝塚では、6類に分類したうちの第3類から第6類までの土器が検討の対象になるかと思われる。第1類の多縄文系土器は、草創期とされるもので時期的に問題にならないし、第2類の山形押型文土器は出土していない。第3類は、安土N上層式に近い薄手で、隆帯上に細線刻を施す土器とされている。松ヶ崎遺跡下層土器のなかでは隆帯もちその上に線刻を施す土器は轟式系と考えられる平口縁の鉢形土器のみである。第4類の羽島下層Ⅱ式に併行する異形刺突文土器は、使用原体がよく分からないが、松ヶ崎遺跡では、半截竹管や二枚貝を使用したと考えられる土器が出土している。第5類の外面積文・内面積痕の厚手土器や第6類の表裏条痕の厚手土器は、松ヶ崎遺跡下層土器のなかでもみとめられる。このように、明確な併行関係を見出せるものが見つからない。年代観で考えれば、第3類の安土N上層式に近いような気もするのだが、いずれにしても、現在の段階では、明確な答えは得られないようだ。

日本海側の早期末から前期初頭にかけての遺跡では、冷温帯から暖温帯への気候変動(温暖化)による縄文海進が小寒期の海退をはさみながら進み、各地の遺跡で丘陵部の崩壊と沖積化をもたらした角礫層の堆積が認められている。松ヶ崎遺跡下層の場合も丘陵部からと考えられる最下層の第19層(黄灰色粗砂礫混じり、直径5～7mm角礫)の堆積が認められる。このため当該時期の遺跡は、削平されたり攪乱を受けた遺物包含層の形で見つかることが多く、良好な遺跡に恵まれることが少ないが、今回の調査結果を得ることができたのは、古砂丘による再堆積に覆われていたからに他ならない。

(とはら・かずと＝当センター調査第2課調査第2係主任調査員)

松ヶ崎遺跡第5次調査のテフラ分析・放射性炭素年代測定・花粉分析については、株式会社 古環境研究所・金原正明(天理大学附属天理参考館)に指導と協力を得た。

松ヶ崎遺跡出土の動植物遺存体の分析については、松井 章(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター)、南木睦彦(流通科学大学)、宮路淳子(京都大学大学院人間・環境学研究科、学振)の各氏の指導と協力によった。

参考文献

1. 坪井清足他『滋賀県石山貝塚研究報告書』(平安学園) 1956
2. 松本雅明・富樫卯三郎「轟式土器の編年」(『考古学雑誌』第47巻第3号 日本考古学会) 1961
3. 藤田憲司・間壁茂子・間壁忠彦「羽島貝塚の資料」(『倉敷考古館研究集報』第11号 倉敷考古館)

1975

4. 網谷克彦他『鳥浜貝塚－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1－』(福井県教育委員会 1979)
5. 網谷克彦他「鳥浜貝塚出土縄文時代前期の研究(1)」(『鳥浜貝塚 1980年度調査概報－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査2－』福井県教育委員会) 1981
6. 網谷克彦他「北白川下層式土器」(『縄文土器Ⅰ』(『縄文文化の研究』第3巻) 雄山閣) 1982
7. 網谷克彦他『鳥浜貝塚 1981・1982年度調査概報・研究の成果－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査3－』(福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館) 1983
8. 網谷克彦他『鳥浜貝塚 1983年度調査概報・研究の成果－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査4－』(福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館) 1984
9. 吉田哲夫「木鳥系土器群の研究」(『考古学研究』第31巻3号 考古学研究会) 1984
10. 泉 拓良「調査の成果」(『粟津湖底遺跡調査報告』滋賀県教育委員会) 1984
11. 植田 真「縄文土器について」(『陰田』米子市教育委員会) 1984
12. 『皆木神田遺跡－団体営ほ場整備事業に伴う遺跡確認調査－』(兵庫県宍粟郡波賀町教育委員会) 1984
13. 『粟津貝塚湖底遺跡』(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会) 1984
14. 網谷克彦他『鳥浜貝塚 1984年度調査概報・研究の成果－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査5－』(福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館) 1985
15. 宮本一夫「近畿・中国地方における縄文前期初頭の土器細分」(『京都大学構内遺跡調査年報』昭和59年度 京都大学埋蔵文化財研究センター) 1985
16. 『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群』(『鳥取県教育文化財団調査報告書』17(財)鳥取県教育文化財団) 1985
17. 『目久美遺跡』(米子市教育委員会) 1986
18. 網谷克彦他『鳥浜貝塚1985年度調査概報・研究の成果－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査6－』(福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館) 1987
19. 網谷克彦他『鳥浜貝塚－1980～1985年度調査のまとめ－』(福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館) 1987
20. 『タテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(鳥根県教育委員会) 1987
21. 『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ(海崎地区1)』(鳥根県土木部河川課・鳥根県教育委員会) 1987
22. 高橋信武「轟式土器再考」(『考古学雑誌』第75巻第1号 日本考古学会) 1988
23. 三好博喜他『志高遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
24. 小杉 康「大蔵山式土器の基礎的な理解に向けて－三矢田遺跡第Ⅴ群土器－」(『真光寺・広袴遺跡群Ⅵ』鶴川第二地区遺跡調査会) 1991
25. 李 相均「縄文前期前半期における轟B式土器群の様相－九州、山陰地方、韓国南岸を中心に－」(『東京大学文学部考古学研究室紀要』第12号) 1994

26. 井上智博「西日本における縄文時代早期末の土器様相」(『大阪文化財センター研究助成報告書 研究紀要』Vol. 2) 1995
27. 井上智博「山陰・西川津式土器の土器型式構造と恩原2遺跡土器群のしめる位置」(『恩原2遺跡』) 1996
28. 第11回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編『縄文と弥生』 1997
29. 戸原和人他「松ヶ崎遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府埋蔵文化財調査概報』第82冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998